

マルコによる福音書 2章 13～22 節

2014年10月23日

古本 靖久

- 1、聖歌 540番 「やさしき息吹の くしき恵み」
- 2、お祈り
- 3、テキストの位置

イエス様は、ガリラヤとカファルナウムを中心に活動をおこなっています。ここまで数多くのいやしをおこなってきましたが、前回の「中風の人のいやしと論争」の場面では、イエス様に敵対する人々の存在が浮かび上がってきました。

治癒物語	1:21-45	多くの人をいやす
治癒と論争	2:1-12	中風の人 のいやしと論争
論争物語	2:13-17	見捨てられた人と共にいる
	2:18-22	古いものと新しいもの
	2:23-28	安息日の行い
	3:1-6	安息日のいやし

前の段落では、罪を赦すイエス様を見ていきましたが、ここでは罪人を招くイエス様の姿が描かれます。またそれに続く断食や安息日に対する論争でイエス様が言われることは、ファリサイ派をはじめとするユダヤ人の指導者たちにとって、大きな躓きとなります。

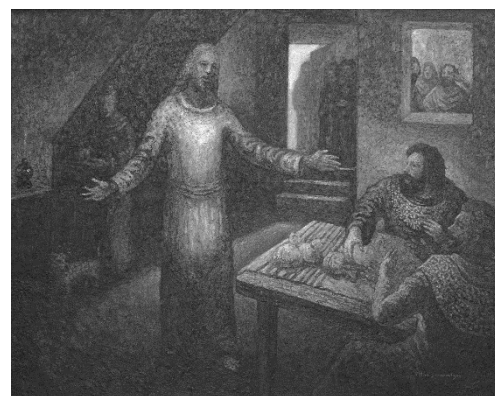
これらの論争によって彼らとの対立は深まっていくのですが、その溝は確実に、イエス様を受難の道へと導いていくのです。

4、1節ごとに

◆見捨てられた人と共にいる

2:13 イエス（彼）は、再び湖（海辺）のほとりに出て行かれた。（そして全ての）群衆が皆（彼の）そばに集まって来たので、イエス（彼）は（彼らに）教えられた。

湖（原文では海）は、ガリラヤ湖のことでしょう。またすべての群衆がイエス様の元に集まってきたことが描かれています。イエス様が大勢の群衆に対していつも教えられていたということはマルコ福音書に多く出てきます。マルコはこれらを重要なこととして位置付けていることがわかります。



2:14 そして通りがかり（すがり）に、アルファイの子レビが収税所に座っているのを見かけて（た。そして彼に）、「わたしに従いなさい」と言われた。（すると）彼は立ち上がってイエスに従った。

アルファイの子レビとは誰でしょう。マルコ 3:14-19には12弟子の名前が出てきますが、その中にレビは出てきません。アルファイの子ヤコブという似た名前、それから収税所に座っている徴税人といえば思い出すマタイという名前はありますが、レビは出てこないのです。召名物語がある人が12弟子に含まれていないのはおかしいと思ったのでしょうか、写本の中には、レビのところをヤコブになっているものがあります。またマタイ福音書は、ここでイエス様に声を掛けられた人物をマタイと書いています。

マルコ福音書の中に、レビについての記述はもう出てきません。同じように10章にはバルティマイの物語がありますが、ここでもレビ同様、彼がイエス様に従った後にどうなったのか、全く書かれません。マルコにとって大切なことは、レビはイエス様に従った特別な者 なのではなく、イエス様に従った民衆の一つの例にすぎないということなのです。

レビはイエス様の話を聞こうと、自分からついて来たわけではありませんでした。いつも通りの仕事をしている最中に、イエス様の方から近づいてきて見つけ、声を掛けて招かれる。そしてレビはその招きに応じ、立ち上がって従うのです。ルカ福音書ではこの場面に「すべてを捨てて」と補っていますが、マルコの中では「従う」という行為だけが重要でした。

2:15 （そして）イエス（彼）がレビ（彼）の家で食事の席に着いておられたときのことである。多くの徴税人や罪人も（が）イエスや（彼の）弟子たちと同席していた。実に大勢の人がいて、イエス（彼）に従っていたのである。

イエス様と共に、レビの仲間たちでしょうか、徴税人や罪人がいました。徴税人とは収税所で通行する人から税金を徴収する人です。彼らは国家にあらかじめ相当のお金を払い、仕事を請け負っていました。税の額は明確に決められていないことが多く、不当に高い税を取り立てることで、自分の収益を増やすこともできました。また彼らはローマ人といった異邦人たちと接触をし、また皇帝の肖像が入っている硬貨を日常的に用いていたために、祭儀的にも不浄なものとみなされていました。さらに倫理的な理由からも、民衆に嫌われた存在だったのです。レビはそのような税を徴収する集団の下役だったと考えられています。ちなみにルカ福音書19章に出てくるザアカイは、徴税人の頭でした。

また罪人とは、律法を遵守しない、あるいは遵守したくても出来ない人たちのことを指します。人を殺したり、盗んだりしなくても、「罪人」になってしまう可能性があったのです。宗教的に、彼らはユダヤ人の中から排除されていました。

2:16 ファリサイ派の律法学者は、イエス（彼）が罪人や徴税人と一緒に食事をされるのを見て、（彼の）弟子たちに、「どうして彼は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。

ファリサイ派の人たちは、イエス様が食事をする様子を見ていました。一般にこの頃の住居は、一部屋だけの家が中庭を中心に集まっており、周りの人たちが家の中の様子を知ることは容易でした。



ファリサイ派とは「分離する者」という意味ですが、彼らは生活の中心に律法を据え、特に祭儀的清浄を重んじていました。したがって、汚れた者と考えていた徴税人や罪人と食事をする事など、ありえないことでした。汚れた人と交わると、自らも汚れてしまうと理解していましたし、彼らの出す食事は食物規定など無視したものだと思っていたからです。また、徴税人や罪人は自分たちユダヤ教という枠組みの内側ではなく、外側にいる人だから、ユダヤ人の教師であるイエス様が関わることは許されなかったのです。

彼らは「どうして」とイエス様の弟子たちに言います。イエス様本人に対して直接意見するのは怖かったのでしょうか。だから周りにいる口で勝てそうな相手を捕まえて、文句を言う。このような光景は今の社会でもよく見ることが出来ますね。

2:17 （そして）イエスはこれを聞いて（彼らに）言われた（う）。「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人（義人たち）を招くためではなく、罪人（たち）を招くため（に来たの）である。」

前半の「医者を～」という言葉は、類似の格言がギリシアの文献にも見られ、ごく一般的なものでした。ところが「義人を招かずに罪人を招く」となると、とたんに人々は違和感を覚えます。彼らはメシアの到来を待ち望んでいました。そのメシアとは、自分たちを抑圧する人々から救ってくれる存在。そして彼らはメシアが来た時に救われたいがために、懸命に義人になろうとしていた。しかしイエス様は義人ではなく罪人を招く、と言われるのです。

イエス様の行為を憐みの行為とするマタイ福音書と違いマルコは、イエス様が義人を捨てて罪人を招くとはっきり言っています。それは義人（神さまの前に正しい人）であるファリサイ派が規定する罪の理解そのものに疑問を投げかけているからです。イエス様にとってファリサイ派が定める罪は、人を自分たちの社会から排斥するものでしかありませんでした。自分たちの生活の枠外に追いやり、食事も共にしないような人々、罪人と呼ばれた彼らと、イエス様は積極的に関わっていかれたのです。



◆古いものと新しいもの

2:18 (そして) ヨハネの弟子たちとファリサイ派の人々は、断食していた。そこで、人々(彼ら)はイエスのところに来て(彼に)言った(う)。「ヨハネの弟子たちとファリサイ派の弟子たちは断食している(する)のに、なぜ、あなたの弟子たちは断食しないのですか。」

さらにイエス様への問いかけが続きます。「なぜ、あなたの弟子たちは～」と。主語は明確に書かれていませんが、普通に考えると、ファリサイ派の人々とヨハネの弟子たちが聞いてきたのでしょう。彼らは、イエス様の弟子たちはなぜ断食をしないのかとイエス様に尋ねます。

ヨハネとは洗礼者ヨハネのことですが、彼は禁欲的な生活をしていました。その弟子たちも、恐らくその生き方に倣っていたのでしょう。

律法では、年一回の贖罪日のほか、請願、哀悼、悔い改めの表現として、断食を求められていました。ルカ 18:12 によると、ファリサイ派は週に二回断食をしたようです。イエス様も荒野での 40 日間に断食をしたとマタイとルカには書かれています。しかしマルコの中でイエス様が祈る場面はたびたび出てきますが、イエス様や弟子たちが断食したり、それを指示する場面はありません。

2:19 (そして) イエスは(彼らに)言われた。「花婿が一緒にいるのに(間)、婚礼の客は断食できるだろうか。花婿が一緒にいるかぎり、断食(すること)はできない。」

婚礼や婚宴、宴会は、メシアの到来によって訪れた救いの時の比喩として用いられます。また花婿と花嫁のたとえば、旧約の中では神さまとイスラエルの契約の表象でした。

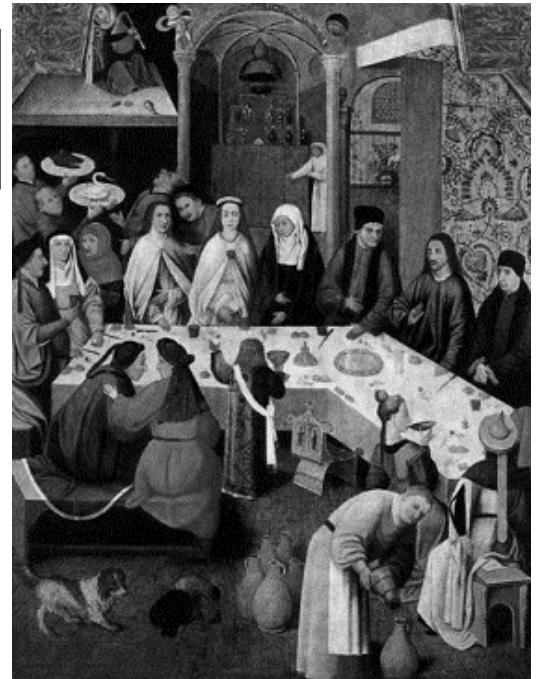
花婿と一緒にいる時、客は大きな喜びに包まれます。教会で結婚式がおこなわれる時に、ボロボロの服を着て髪はグシャグシャ、髭も剃らずに一人嘆き悲しんでいたらどうでしょう。きっと追い出されてしまうに違いありません。しかしここでイエス様が言っていることは、そんなことではありません。メシアの到来という大きな喜びは、律法によって定められた断食の掟に優先すると言い切っているのです。

当時、年に一度ならまだしも、習慣的に断食することが出来た人は少なかったでしょう。特に「地の民」と呼ばれていた人たち、「罪人」は、食事だけが日常の大きな楽しみだったでしょうし、生きる上で必要不可欠なことでした。そのような彼らと、イエス様は共に食べることで、ファリサイ派の求めるユダヤ教の慣習を破棄するのです。

2:20 しかし、(自分たちから)花婿が奪い取られる(取り去られる)時(日々)が来る。その(時こそ、その日には、彼らは断食することになる(だろう)。

ギリシア語を見てみると、「取り去られる日」の「日」は複数形で、「断食する日」の「日」は単数形になっています。この違いを単純に書き間違えと取る人もいれば、ここから深い意味を読み取ろうとする人もいます。マルコ福音書では、イエス様が不在になるのは十字架と復活の間のたった二日間にすぎません。そのわずかな時を複数形の「日」と考える、それだけのことではないかと思えます。

イエス様は婚礼の喜びの場所から、取り去られてしまいます。その日、つまり十字架の日には、イエス様の弟子たちは断食をすることになるのだと言われています。イエス様はガリラヤでの活動の初期段階で、すでにご自分の十字架の死を予告してもいるのです。



2:21 だれも、織りたての(まだ晒されていない)布から(の)布切れを取って、古い服に継ぎを当て(し)たりはしない。そんなことをすれば、新しい布切れ(もの)が古い服(もの)を、(継ぎ布が服を)引き裂き、破れはいっそうひどくなる。

まだ水に晒されたことのない布は、濡れたり洗濯をしたりすると縮んでしまいます。それに対して古い服は、もう何度も水に晒され、洗われてきたでしょうから、これ以上縮むことはないのです。ではもし、晒されていない布を古い服に継ぎ当てたらどうなるのでしょうか。洗濯をした時に、継ぎ当てた布は縮もうとします。しかし古い服は、これ以上変化することができません。晒されていない布は水分を含むにつれて、古い服の生地を引っ張ります。そしてついに、古い服は引き裂かれてしまうのです。

このイエス様の答えは、断食に関する問いへの答えでした。古い服とは何でしょうか。ファリサイ派やヨハネの弟子たちが大切にしてきた、断食という習慣でしょうか。ファリサイ派が定めてきた「罪」の概念でしょうか。イエス様はこのたとえを用いて、こう言われます。

「新しいものが古いものを引き裂いていく。新しいもの、すなわち変化の途中にあるものは、その力で既成のものを破壊していく」と。

わたしたちが今、大切にしているものは、イエス様から与えられた「新しいもの」でしょうか。わたしたちはこの断食に対する問答を通して、「古い自分」を脱ぎ捨て、新しい衣を着るようにと、イエス様に促されているのです。

2:22 また、だれも、新しいぶどう酒を古い革袋に入れたりはしない。そんなことをすれば、ぶどう酒は革袋を破り、ぶどう酒も革袋もだめになる。(むしろ) 新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れるものだ。」

先日の朝ドラ「マッサン」の中で、瓶詰のワインが、残留酵母が働いて爆発するという話がありました。そのぶどう酒は特に新しい酒ではなかったようですが、酵母を十分に除去していなかったために、太陽熱の影響で中の酵母が活動したために起こったことでした。

ぶどうを収穫して圧搾すると、すぐに発酵が始まります。しかし、一日や二日でぶどう酒が出来上がるわけではありません。ぶどう酒が出来上がるまでには数か月を要します。

イエス様が言う「新しいぶどう酒」とは、まだ発酵している途中のぶどう酒を指します。また革袋とは、今日で言う「水筒」のようなもので、保存のために用いたわけではありません。普通このような新しいぶどう酒は、壺とか樽に入れます。多少膨張しても、壊れないからです。またどうしても革袋に入れたい時も、もう布が伸びることのない古い革袋ではなく、自在に伸び縮みすることのできる新しい革袋に入れるのです。

新しいぶどう酒、すなわちイエス様の福音は、古い革袋であるユダヤ教の宗教的慣習の中には納まりきれず、打ち破ってしまうものだと、イエス様は言っているのです。

<今回の箇所から>

福音書には、数多くの食事の場面が出てきます。前半のレビの物語の中でも、イエス様は徴税人や罪人と食卓を共にしています。今日の箇所ではファリサイ派の人々が、そのような人々との交わりを拒絶し、イエス様がその人たちと一緒にいることを批判していました。もしわたしたちがその場にいたら、どうするでしょうか。イエス様がその場にいることに気づかず、自分たちだけ他の場所に行き、飲み食いをするかもしれません。

わたしたちは今、主日に聖餐式をおこなっています。その交わりの中に、徴税人や罪人はいますか。社会から見捨てられ、神さまに寄り頼まないと生きていけないその人を、心から受け入れていますか。その人の中に、イエス様を感じることはできていますか。

またわたしたちは、断食ではなく、喜びの食卓を囲むことを命じられています。復活したイエス様を受け入れるためには、わたしたちの心はどうあるべきでしょうか。古い自分に縛られたままでは、イエス様を破り捨ててしまうことになるのかもしれません。

今回の学びは、これで終わります。次回は11月20日(木)10時30分～で、「安息日に麦の穂を摘む、手の萎えた人をいやす(マルコ2:23～3:6)」について学んでいきます。